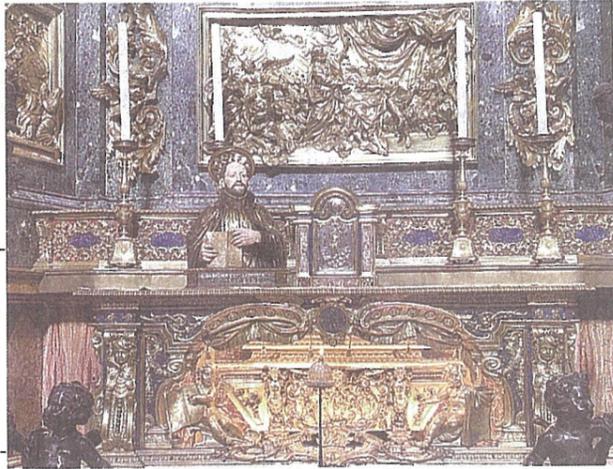


イグナティウス・デ・ロヨラ

イグナティウス・デ・ロヨラ(1491～1556年)は、スペイン北部バスク地方のギプスコア出身で、貴族オニャスカの一族です。この地域では15世

イエズス教会内のイグナティウス・デ・ロヨラの祭壇と像(ローマ)



大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



紀以来、ナバラ王家とカスティーリヤ王家の対立と抗争が繰り返され、ロヨラはカスティーリヤ側に加担していました。

ところが、1521年のパンブローナの戦いで砲弾が足に当たり、生涯残る傷を負います。それまで軍人としての栄達を夢見ていましたが、療養中、14世紀ドイツの修道士ルドルフの神学書「キリストの生涯」に出会い、瞑想修行をし、一切を聖母にささげる決意をしたといわれます。

28年には、フランスのパリ大学へ入学して神学の道を究めます。古風な騎士道式の宗教的情熱と修養理論、そして教祖めいた人格と霊的指導力を持つ彼の

下に、フランシスコ・ザビエルら6人の同志が結集。34年8月、ロヨラを中心にパリのモンマルトルの丘にあるサン・ドニの地下聖堂で、清貧・貞潔・聖地巡礼の三つの誓願を立てイエズス会を発足させました。

教皇パウロ3世の認可勅許を得た彼らは、カトリック教会の修道会として世界での宣教活動を開始します。イエズス会の宣教師として49年に日本を訪れたザビエルも、会の総長ロヨラから抜てきされたものでした。では、ロヨラたちイエズス会は、16世紀の日本、特に各地に群雄割拠する戦国大名たちをどう見ていたのでしょうか。

54年5月に、ポルトガルのインド管区副管区長メルシオール・ヌーネス・バレットがロヨラに宛てた書状が残存します。それによると、ザビエルが51年に離日する際、大内義長・大友義鎮(宗麟)・松浦隆信の3大名が、ポルトガルのインド副王

アフォンソ・デ・ノローニャに親書を送ったことが分かります。

注目されるのは、その原文で、

義長は「e i r e y d e A m a n g u c h e」(山口の国王)、義鎮は「e i r e i d e B u m g o」(豊後の国王)、隆信は「e i d u q u e d e F i r a m d o」(平戸の公爵)と記されていることです。ロヨラたちが、日本各地の大名を「国王」や「公爵」と認識していたことが分かります。ヨーロッパから見れば16世紀後半の日本列島は、一つの国家ではなく、複数の「国王」「公爵」が並立する地だったのです。

イエズス会の初代総長ロヨラの礼拝堂は、イタリア・ローマのイエズス教会内にあり、隣接地には晩年に過ごした部屋、遺品が保管されています。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1日掲載

神学の道を究め、イエズス会創設